
岸田家の異世界冒険 番外編

冬の黒猫亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

岸田家の異世界冒険 番外編

【Nコード】

N5472V

【作者名】

冬の黒猫亭

【あらすじ】

異世界トリップしてしまった岸田一家の番外編。

【真実子の他愛のない厄日】（前書き）

お気に入り登録2000突破のお礼小説でございます…短いですが
（汗）

本当にありがとうございました。

【真実子の他愛のない厄日】

【岸田真実子 高校一年生、春】

ハロー、ハロー。

こちら、最前線からお送りしております。

えゝ、真実子です。

通称・ミコでございます。

呼び名は、家族推奨——ですが、ミイコとか、ミイたんと呼ぶぐらいなら、いつそのことミコで結構です。

春になると、変質者が多いと申しますが、私の町もそうらしいです。

馬鹿というか、犯罪者予備軍が増えているらしいのですが、まさに私は現在進行形で遭遇中です。

この暖かな春の日差しの中で、帽子、サングラス、マスク、ロングコートに声かけられた時点でもっと怪しもうよ、自分。

まあ、それはさておき、パターンどおり、がば、とコートの前を大きく開きました。

肋骨の浮き上がるほどのがりがりの裸体に、お粗末な象さんがぶらぶらしております。

それに靴下と靴を履いてるって、なんかマニアックだね。

——で？なに？

襲い掛かってくるんだったら、父から貰った改造スタンガンぶちかます準備はできておりますが、そのまま男は停止したまま。

いつもなら我関せずで、通り過ぎる程度だが、今日は違う。

休日だったので、姉と遊びに出かけておりました。

帰宅に向けて最寄の駅に向かう途中で近道のために人通りの少ない道へ。

そこで、変質者の登場。

姉が、につこり——そう、につこりと背筋も凍るような壮絶な微笑を浮かべた。

……目が、笑ってない、姉。

「ぐああっ——！」

私がそう思うとほぼ同時に、姉の美脚から繰り出された猛烈なハイキックが変質者の無防備なコメカミに叩きつけられました。

パンプスで放たれたとは思えない衝撃に、よろける変質者。

そして、抵抗のない変質者に対して、今度は姉の腕が振りかぶられた。

「——っ!」

手にしていた頑丈そうなエルメスのバックの角が変質者の象さんを直撃。

変質者は悲鳴を上げることなく、今度こそ崩れ落ちた。

ひとつ息をついて姉は冷静に、警察に連絡した。

やってきた警察官に、うるうると必殺の上目遣いで、変質者が『怖かった』だの、『気が動転してて』だの言いながら、体を縮こまらせる。

調書やら何やらが終わり、泣き落として警察官を誑し込む（？）と、パトカーで自宅まで送ってもらった。

「よかった…帰りの地下鉄代、浮いたわね♪」

警察官に礼を言つて、玄関を扉を閉めた姉の第一声である。

姉の凶暴さと、恐るべき変わり身の早さと、がめつさに私は乾いた苦笑を返した。

それから、喉から出そうな言葉を飲み込んだ。

……あれ、過剰防衛、だよな？

後日、件のエルメスのバックを質に出すと、新たなグッチのバックを買ったために、私たちは懲りずに週末に街中に出向いた。

【真実子の他愛のない厄日】（後書き）

異世界トリップ前の姉と妹でございます。

妹↓害がなければ、関心なし

姉↓即抹殺

【孤独のない由唯の平日】（前書き）

お気に入り登録2000突破のお礼小説が、短かったような気がするのもう一本追加。

【孤独のない由唯の平日】

【岸田 由唯 高校二年 夏】

「へぶうつつ!!」

叔父に教わった回し蹴りが、男の鳩尾に決まり、体をくの字に曲げて地面に転がった。

まあ、あの男も役に立つものよね。

迷惑ばかりかける割には、兄より被害ないし。

数年に一度程度にしか会わぬ父の弟は、原始人のような暮らしをしているが、暴漢対策として教えられた武術は、実に披露する場面が多かった。

合気道と柔道が混ざったような感じで、打撃も一通り教わった。

よく襲われるため、独自の研究でしていた。

一番気に入ったのプロレス技。

妹を実験台にして、かなりの精度だと自負しているが、ストーカ―や暴漢相手に素手で触れたくないの、頻度が高いのは必然と合

気道と打撃だった。

まだ起き上がろうとする暴漢に、父が改造したスタンガンで、止めの一発。

まったく嫌ね。

きりがないうって言うのはこついうことかしら。

一人心地で内心呟いて、髪のを直す。

今日だけで二回目だ。

朝に学校に登校する前に、そして校舎を出てから、三百メートルで。

ちらり、と視線を流す。

電柱の後ろ。遅い速度で走る車。曲がり角。

舌打ちしたい気分だった。

これから帰宅するだけだというのに、実に長い時間がかかるであろう予測ができる。

昔はこれで大慌てだったが、今では冷静なものだと自分でも思っ

人間は慣れていく生き物だと、実感する。

目の前で暴漢を徹底的に叩きのめすというパフォーマンスをしたのにもかかわらず、減った追跡者^{ストーカー}はたった二人であった。

まだ、三人は諦める気がないようだ。

一匹見かけたら、三匹はいるというが、この先にもまだウジャウジャいるかと思うと、正直げんなりとしてくる。

なにが原因か知らないが、ここ数日こんな感じた。

——由唯姉はいつもストーカー大安売りだよね。セールつか。

前に妹の言葉が脳裏を過ぎて苛立ちを覚えるが、いつもはこんなに多くないはず。

ついてくるだけの普通のストーカー……いや、ストーカーがすでに普通じゃないけど、平日だろうと休日だろうとお構いなしにいるので、感覚が麻痺しているのだろう。

ともかく、大人しい奴が一人、二人いる程度だ。
一人で帰ったためしがない。

ただですら、女子高ではないはずなのに、周囲にわらわらと女子が集まってくる。

『お姉さまw』

クラスの大半が男子であるにもかかわらず、なぜ女子生徒をはべらす結果になっているのだろうか……人並みの生活を望んでいるというのに。

ともかく、忙しいというか、心休まる時間がない。

朝登校して、下駄箱を覗き込めば、ラブレターと、怪文書と、釘やら針の刺さったわら人形が一緒になって入っているのは珍しくない。

授業の間の休憩時間は、女子が周囲に集まり、昼休みと放課後は、告白の返事——女子8割男子2割っておかしいけど——掛け持ちやら、怪文書の犯人を締め上げる。

後は持ちかけられた相談を解決したり、恋のキューピットをした
り。

ゴタゴタが持ち込まれるのは勘弁してほしい。

その分、家ではぐーたらになって、妹をこき使ってしまうが、この日常が終わりを告げない限りは続くような気がした。

「おー、容赦ないなあ」

近くから聞こえて驚いたが、聞きなれた声に、すぐに警戒を解く。

「まあね。珍しいわね、兄さん、こんなところに――ああ、兄さん
ってわけ。また派手にやったの？」

自らの兄の登場に、大凡の事態を理解した。

あからさまに爽やかな笑顔を浮かべているが、兄という元凶の出現を考えれば、実に自分が危険な状態だったかを知った。

何処かから恨みを買って、尚且つ叩きのめしたのであるうことを察して、苦笑した。

そのせいで、お礼参りや、嫌がらせが兄弟に向いたのだろう。

「ミコは？」

兄の誘導で移動しながら、肩を竦めた。

「学校早退してきて、家でゴロゴロしてるよ。帰りにケーキ買って来てくれ、それで手を打とうって言ってたぞ。お前もケーキでいいか」

「……コンビニのだったら許さないけど」
「了解」

兄のゴタゴタに巻き込まれながらも、ここぞという危機回避能力はわりと高く、五回に三回は回避するぐらいなのだから、今回は当たりだったのだろう。

立ち向かってしまう自分とは逆に、要領のいい妹に関心しながらも、ちら、と背後に視線を送る。

兄の信者による制裁が終わったのだろう。

すでに、電柱の方と、曲がり角は決着がついたのか、ついてきているのは車のみ。

はぁ、と思わずため息がでる。

普通の生活がしたい。
切実に。

高望みをしているわけではない。

心から信頼できるノーマルな女友達——カラオケボックスに二人で入ったら襲ってくるとか、体育の着替えを凝視してきたりしない、信者的な後輩とかでもなく——と、一緒に、帰り道に喫茶店に寄ったり、買い物したりを楽しんでみたい。

後は普通に恋人とか——けして、ストーカーとかではなく、兄の報復のために近寄ってくるような顔だけの男でもなく——日曜日にデートしてみたい。

常に周囲に気を配り、必然的に護身術を習うような生活からは足を洗いたいのだ。

だが、この兄がいる限りは、難しいだろう。
昔と違って、こうしたフローも忘れないし、別に嫌いというわけではない。

この妹に生まれてきんだからしょうがない。

何度目か分からぬため息をついて、ケーキ屋のある大きな通りに出たときには、すでに後方から車が追ってくる気配はなかった。

兄を見上げると、にか、と爽やかな笑顔を浮かべていた。
相変わらず胡散臭かった。

【孤独のない由唯の平日】（後書き）

蒼い杜様、番外編までコメントありがとうございます♡

それで思いついた他愛のない姉の日常の「コマでした。
多分、毎日が忙しい姉。

【雅美の珍しく平和な過日】（前書き）

お気に入り登録2000突破のお礼小説が、次女、長女ときたので
もういつそのこと長兄も（笑）

またの名を第二章進まないから、いろいろ番外編でちょっとクール
ダウンしてみたり……。

【雅美の珍しく平和な過日】

【岸田 雅美 高校二年】

溜まり場と化した空き教室では、思い思いに腰をかけて昼食をしている。

購買部のパンを頼張るもの、弁当持参なもの——彼女の手作り弁当を持ってきているやつには聊か殺意を覚えなくてもいいが——総勢7名。

学年もクラスもバラバラ。

いつもは、もっと多いが、三年が既に登校していないので、こんなものなのだろう。

停学を受けて、自宅謹慎のものもいるせいでもあるが。

この空き教室に足を踏み入れることを許されるのはステータスらしい。

ただの多目的教室に使われているので、別に好きなように入ってきてもいいのだが、その根性があるやつはいないようだ。

分からなくもないが、男子校でもないのに、女子が一人もいないというのは、暑苦しい。

普通の学生のように教室や、中庭で食事をしてみたいが、これだけの噂になる生徒と移動すると他の生徒に迷惑がかかるだろう。

そこそこレベルの高い学校で生徒の自主性を重んじる校風とはいえ、教師にも目をつけられている。

ただ知り合いが集まっているだけなのだが、なにせ問題児が多い。教師でも手を焼くような生徒たちばかりである。

三日に一回は仲間同士で殴り合いの喧嘩も珍しくない。

それに、つい先日、隣の高校の人間と小競り合いを起こしたばかりだ。

金の貸し借りと、パシリ、弱いもの虐めは、ご法度だが喧嘩は身内のじゃれあいのようなものだ。

よほど大事にならない限りは、仲裁に入るのが面倒なので止めない。

「——っスよね、岸田先輩！」
「ん？」

ミステリー小説を読みながら、母特製の出汁入り卵をつついていと、一年の大蔵が楽しそうに俺に同意を求めてくる。

格好は一昔前のツッパリのような姿をしている。

大蔵といえば、二年前まで大暴れしていた中学生で、たしか『四中の狂犬』とか言われており、高校生だろうが大学生だろうが、喧嘩をしまくっていることで有名だった。

出会ったのは確か、街中で逆ナンされてた所を大学生に絡まれ、さらに大蔵に絡まれた。

まあ、その時は俺も若かったので、前者も後者も半殺しにして、その場を立ち去ったのだが、その後から、執拗に大蔵に絡まれた。

週三ぐらいのペースで絡まれて――気がつけば、自称・舎弟になっていた。

「絶対、A組だっつーの。あの顔で胸でかいんだぞ？」

「いや、D組だって。あのスラッとした足がiiiiっスよね、先輩」

話の内容は一年A組の女子が可愛いが、D組みの女子もタイプが違っけど可愛い。

もう一人の佐賀――こいつも、大蔵ほど有名じゃないが中学時代は『暴走特急』とかいうあだ名がついていたような――はA組で、大蔵はD組らしい。

こっちは、着崩した学生服がチンピラっぽい風情をかもし出しており、ピアスが耳にも鼻にもついている。

「どっちも名前じゃわからんなあ」

男というのは、いつだってこんなものだろうと思いつながら小首を

かしげる。

一年とは接点が少ないせいか、見た事ぐらいはあるかもしれないが、名前までは分らない。

不本意ながら廊下歩いて、十戒のように人ごみが真つ二つに割れるし。

「雅美には彼女いるんだし、そんなこと聞いてやるなよ」

「え、ええっく先輩彼女いるんスか？」

俺の隣でノートパソコンに指を滑らせていた眼鏡男子・田沼が横から口を挟んでくる。

どうやら恋人達の愛妻弁当を速攻で食べたらしく、お弁当箱が山積みになっている。

同級生で、高校時代からの付き合いだ。

近隣の高校生の情報なら、事欠かないぐらいの情報通で、真面目そうな容姿だが、こう見えても女たらしで、軽い。

大蔵を筆頭に、他の全員が素つ頓狂な声を上げる。

なんだよ、彼女がいたら可笑しいのか——って、いないんだけどな。

「いや、俺も初耳だ」

「なにいつてんだよ。俺見ちゃったぜ？こないだ美人連れて歩いてただろ。仲良さげに並んで歩いちゃってさあ」

恋人がいない俺が女連れで歩くとしたら、残念ながら迷子とか道案内ぐらいたが…なんだ、もしかして由唯のこといつてるのだろうか？

兄弟仲は悪くないし、普通に並んで歩くだろ。

にやにやと笑う田村。

「先週の日曜日か？髪の毛が茶色でカールしてて長めの？」

「そうそう！ちよつと年下で、凄い美人だったよなー。ちよつと気の強そうな感じで、っん、してるけど笑うと、周囲が明るくなるってか、可愛いかんじでさあ」

「そりゃ、妹だ。荷物もちにされたんだよ」

田沼が固まったと思ったら、声を裏返して、叫ぶ。

「ええええええ！！あれが噂の凶暴な妹さん？？ありえねー！！」

プロレス技で一番下の妹を気絶させた話のせいか、岸田長女凶暴説が流れているらしい。

まあ、あながち間違いではないが。

田村が目を白黒させている横で、長野——こいつは、かなり頭が切れて、大人しく、喧嘩が好きではないのだが、ごつい顔と体が災いして、よく喧嘩を売られているらしい——が声を上げた。

その巨大な手には不釣合いのイチゴ牛乳。

「ま、ままま、待て。今週の火曜日に歩いていたじよ、じよせいは？」

「は？火曜日？？」

なぜそんなにどもるんだ？

不思議に思いながら、三日前の記憶を蘇らせる。

女性はつれて歩いていないが、帰り際にスーパーから出てくる母を見つけて、荷物を持った記憶があるが、それ以外にはなんにもないな。

「あー……肩ぐらいまでのフワフワした髪で、おっとりした感じの？」

「そう、それ！親しげに、荷物とかかわりに持ってたたる！」

「あ、それ俺も見たことある！」

他のやつも声を上げる。

つてか、その場において気になるんなら声かければいいものの。

でも母の年齢不詳の容姿を考えると、俺ぐらいの年の子供がいる年配の女性には見えないだろうな。

それに俺の容姿は父親の若いころにそっくりらしいし、母とは似ても似つかない。

何度も学校に呼び出しされてるから、周知のことかと思ったが、違ったようだ。

今度こそ、俺は長いため息をついた。

「ありゃ、母だ」

一瞬の間をおいて、イチゴ牛乳を握りつぶした長野が素っ頓狂な悲鳴を上げて、なぜかその場に倒れこんだのだった。

・
・
・
・
・

後に本当だと証明するために、家から家族写真を持ち出したので納得してもらった。

「俺の、初恋が——……」

恐ろしい眩きを零した長野は、その日学校を早退した。

2、3日寝込んだらしく、学校を休んでいた。

そして、写真の中の由唯の姿に、大蔵が一目惚れをしてストーカーになるのは、また別の話。

【雅美の珍しく平和な過日】（後書き）

別名：兄と愉快的な信者たちと、長女のストーカーフラグ。

【王家の食卓1】 岸田母 vs 女王宮料理人（前書き）

拙い小説をいつも読んでいただき、ありがとうございますw

総合評価 8000pt 越え記念小説w

本編とは多分、なんの関係もない？であろう小説なので、番外編扱いにさせていただきました・途中なのですが、長くなってきたので、ちよつと分けさせていただきました orz

【王家の食卓1】 岸田母 vs 女王宮料理人

場所は昼食の準備に勤しむ第一厨房——通称『王家の食卓』であった。

「どれだけ、お偉い流離人様だか知らないけどね！ここはアタイらの持ち場さ！お嬢さんの来る場所じゃないよ！」

啖呵を切ったのは、王宮料理人カルラだった。

三十台前半ぐらいの女料理人だ。化粧つけのない清潔感に溢れる面立ちを嫌そうに歪ませて、顔半分は低いであろう東方系の顔立ちの女を睨みつけている。

女の後ろに控えるそこそこの位の高い護衛の騎士。

緘口令が末端まで下されているが流離人であることはカルラも察していた。

流離人の家族がイシュルスにやってきたという噂は小耳に挟んでいた。

本当か嘘か知らないが、馬を使わない馬車に乗っているだとか、巨大な黒熊を共にしているとか、牢屋にいれられているとか。

就寝時間が迫っていた時に、王家の食卓で五人分の食事の追加が

料理長から言い渡され、慌てて料理人一同は仕込みをした。

それが噂に真実味を持たせていた。

『王家の食卓』は、国の要人が滞在すると、食事を提供する。だから誰がやってきたかわからずとも、人数は把握しているつもりだ。

勿論、何週間も前から事前に言い渡されている。

だが祭りの時期でもないのに、突如として夜に五人分の朝食の追加が入ったことから考えても、その食事が王の配給係りの執事とメイドが運んでいくのを考えても、噂は間違いではないだろう。

ルエイト
流離人は王と一緒に食事をしたのだ。

この『王家の食卓』に礼を言う人間は限られている。

そもそも、国交先の要人は直接キッチンにやってくるなど、まずない。

配給係に間接的に礼を言う程度。

彼女が騎士を連れて、料理長に朝食の礼を言ったまではよかった。

カルラだって、このリエと名乗る妙齡だろうが愛くるしい女の子の礼を聞いて、内心当然だと思いつつも喜んでいた。

男の料理人など、魅力的な女の姿に鼻の下を伸ばしていた。

別に悪いとはいわない。

彼女の纏う空気は柔らかく独特で、浮世離れはしていたが、カルラも不快ではなかった。

「大変恐縮なのですが、王様の昼食の料理、私が作ってもよろしいでしょうか？」

ただ、彼女のその一言に料理長が答えるより先に、頭に血が上り、カルラは反射的に冒頭の言葉を浴びせていた。

+ + +

カルラは旧体制のイシュルス王家にはありえなかった女料理人である。

王宮料理人は完全なる男社会。

明確な掟があるわけではない——が、その伝統は何百年も前から当然のように続き、いくら腕がよくても、ただ女であるというだけで、厨房に入ることを許されなかった。

だがレジーニッシュルスが王座つき、長い圧制の終わりと共に、この国は新たな道を歩みだした。

彼が行った改革のひとつ——職業差別の廃止。

素質、能力とも問題がなくなるとも、旧王家では、身分・性別の壁はとても分厚かった。

それを撤廃したのがレジー王なのである。

時間はかかったが、新たに優れた人材を徐々に受け入れだした。

その流れが厨房にも押し寄せて、一番最初に雇われたのがカルラである。

勿論最初から第一厨房である『王家の食卓』に配属になるはずもなく、王宮に勤める者たちの食堂である第二厨房——通称『王城の胃袋』——の下っ端として小娘の時に雇われた。

だが旧イシュルス体制から勤めている頭の固い男の王宮料理人は、カルラを冷遇で迎えた。

陰湿な嫌がらせはなかったが、泣き出す夜は多かった。

それでも齒を食いしばって、なんとか続けてきたのは、最早意地だった。

本当は後二人ほど女の料理人が雇われていたが、ようやく第二厨房の料理に携われるようになった時にはカルラしかなかった。

それから女盛りの青春を料理に捧げて、十数年経て、ようやくイシユルス料理の最前線といわれる第一厨房に配属なった。今年で二年目の下っ端ではあるが彼女はそれを誇っていた。

だが、この町の数少ない女料理人の先駆者となったのだ。

『王家の食卓』は料理人が一度は夢見る憧れだ。

最高峰のイシユルス料理の伝統的技術を学び、一般では扱うことのできない最高の食材を扱うことができるのだ。

雇われた当初は素晴らしいと思っていた『王城の胃袋』の食材も、ここでは極々普通に使われている。

普通ならば一生口にすることもないであろう食材を調理できるのだ。

この国を新たに作り変えた——そして、女の王宮料理人の道を開いた獅子王の為に。

それが、ぱつと出てきた女に軽々しく請われて、カルラの怒りは爆発した。静止させようとする周りの声すら聞こえていない。

悪魔のような形相で、敵意むき出しの言葉を浴びせたというのに、『でもう——』と、意外な事にリエは引き下がらなかった。

またそれがカルラの怒りを煽る。

感情のままに自分のきつちりと被られていたコック帽を取ると、リエに投げつけていた。

カルラの誇りとプライドの象徴であり、王家の紋章の刺繍が入っている。

『王家の食卓』の料理人がどよめく。

「だったら、食神^{シヤヘン}タイベルの名において、決闘を申し込む！アタイを倒してから、我俤いいな！！」

カルラはこうして己の立場を確立し、言い分を通してきた。だから、第一、第二の厨房に関わらず『決闘料理人のカルラ』と呼ばれていた。

伝統的な料理対決の申し込みに、リエは目を瞬かせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5472v/>

岸田家の異世界冒険 番外編

2011年11月3日00時07分発行